



中御門家記録

長動題



三五九





明治十二年己卯月一日起

會館及御廻達留

十三年未中御門家

役所

Handwritten text on the right page, appearing as bleed-through from the reverse side. The characters are in cursive and difficult to decipher due to the paper's condition.

昨日の午膳、あつておなごは  
あつた。午後三時、おなごは  
しるはちやう

四月十二日、一、おなご

一

四月九日

四月十日

孝明天皇の御例、あつた。おなごは、  
あつた。

四月十二日、おなごは、  
あつた。

方禮後乃... 後事... 也

十一日...

或部... 也

方... 也

中... 也

十一日...

智部... 也

遇... 也

二... 也

右... 也

十一日...

百... 也

Handwritten notes in the gutter between pages.

帝

三

長...

二月...

第...

東... 也

山... 也

可... 也

和... 也

已... 也

也

羽鳥幸房の書名の中

幸房の別名

持方と云ふは幸房の別名

幸房の別名

叔任の書名

叔任の書名は幸房の別名

幸房の別名

幸房の別名

別名

幸房の別名

幸房の別名

幸房の別名

幸房の別名

幸房の別名

幸房の別名

二月一日

方二齋

明二日法自法申自法者之官  
方法者方之法第第二時由法  
法之法者之法也

三月十日

智長 岩若果親

中法 中法

方以師原編書中事也

二月三日

二月七日家信去年辭子一負投  
西京想當年每有新官因於子年以口  
之十年後一所有餘一法出法投原者  
之度其法也法中一十年後法通也  
者之何也

明正二年二月三日 義法之云

方以師原編書中事也

二月三日  
古山郡字編子車自及子子

二月四日

副館長として生基修館長御名前之  
副館長武者少路実世が辞表を以  
て辭退を成せ因て此の爲め此口海  
以通分取例に因り修館長御名前之  
とあり

此の事本より後新聞紙ありて  
修館長御名前之事あり

中  
二月五日  
二月六日

基修館長御名前之事あり  
二月六日  
二月七日  
二月八日  
二月九日  
二月十日  
二月十一日  
二月十二日  
二月十三日  
二月十四日  
二月十五日  
二月十六日  
二月十七日  
二月十八日  
二月十九日  
二月二十日  
二月二十一日  
二月二十二日  
二月二十三日  
二月二十四日  
二月二十五日  
二月二十六日  
二月二十七日  
二月二十八日  
二月二十九日  
二月三十日

スルノ道未夕全ク備ラヌ周テ多ク後  
 開設ノ儀ヲ闕ク建言セント悪ク  
 未夕其事一ノ不墜ハ其修ノ意  
 見或ハ闕下ニ異ル田ル故ナラシテ  
 際當年一月中旬ヨリ執病ニ罹  
 里居療養ニ改メ旬余ニ及ビ急遽  
 全快ノ難成キヲ覺テ因テ本職ヲ  
 辞シ寓ト療養ニシテ病ニ已ニ瘳ク  
 自後杜ナルヲ得以テ他日

帝室ノ厚恩ニ報ト又同族ノ義務  
 ナリサント故ニ闕下宜シク其特實  
 ナク察シ賜ヒ速ニ解職ノ儀ヲ許  
 索ナラシテ希希トシテ長任生  
 病長山ノ名トシテ

誨長兼新々辭職書  
 昨年申諺ニ誨長兼新員ニ被公撰  
 候以未就職致居其後有誨事件



言終親於生假こるし條理二據り  
職守を重し之微誠以盡之故得重累  
微而不任職務其用十二因之而職辭  
退其異望候就て之衆議員ヲ總會  
之公明正統二理田年述致度候得  
其直言口業候て自己ノ潔白ヲ表  
却て衆聽ヲ聳動スル嫌忌有之  
名遺穢直て之辭職書取出候  
尤有後之關係凡入其申之議  
事一件板留兼知ノ者有之上存

後會館ノ景況ニ應ニ衆人自カラ理  
由ヲ知ルニ足ニ耳 謹言

去年十月廿二日 柳 東 前 出 人

筆 藤  
會 殿 議 事 務 局 職 員 同 啓

理論謹識席ニ俗情凡古ニ副ハハ止  
邪相軌ル古存免ル能ハハルナリ是ヲ以テ  
君子ノ自守ヲ重シテ以テ其行ヲ極ケス

此處ヲ得テ後テ其志ヲ成セシムル  
文徳新ハルニ言ノレシ又信ヲ社会ニ  
行ハシメテ其志ヲ成セシムル  
レハ進テ之ニ出テ居テ思ヒ謀行ス  
言ノレシ又信ヲ社会ニ  
子退テ其身ヲ潔クスルヲ以テ月  
肩謂笑曾子之ヲ疾ニ未用而言ハ  
子路之ヲ耻ニ矣世不月ヲ以テ金銀副  
後長員議負ノ權ニ當リ凡起戰競

其任ノ效テニスミテ以テ衆望ノ至キ其月  
カコトヲ懼レ遠クノ論夜テ自ラ欺カ  
ス鄙心常ニ事ニ  
聖王ノ優渥ニ感テ四罪ノ効力ヲ能ク  
其ニ從テ有議ノ法ヲ論定シ實ニ  
ノ極ニ調定シ致テ其情ヲ其面ヲ改  
メ條規得テ更ニ張ルニ至リ抑莫世ニ違  
取効ト是ノ如クシテ而メ止マサレ者  
ハ聖王ノ至章造次モ之ヲ忘レ  
可カラス偶思無日里顛沛モ之ヲ教

とサハ可カラセテ以テナリ然ルニ理論愈テ  
俗情ニ及シ謹議仍リニル旨ニ墜ト然レ  
是レを鯨為ヲ招キ非難ヲ蒙リ左義  
業息テ憲則亦毀々レトス嗚呼  
雲大陽ヲ遮サ故ス葵草干鳥ニ似ルホ  
ヲ知ラニ憲令諒覽ヲ招キテ屈柔懐沙  
ハ賦ヲ作リ臣策用ヒラレズ質生長  
沙ノ編ニ逸フ節ヲ折リ志ヲ変スル  
ハ君子能ツルホ立憲ヲ在テ俗従フ  
折口人々之ヲ辞ス比異クハ身ヲシテ西鶴

縛ノモリヲ脱シ志ヲ千里ノ道ニ伸ハシ  
ニシテテ頓首南拜  
中流土年下リ大勢 武者亦所守也  
辛酉夜會書  
今多ク後多ク好むる極多クハ中  
別方ニシテ此レを以テ以テ色色申入  
有る事多クハ此レを以テ以テ色色  
所由也 一ノ方ニシテ

若くは此レを以テ

所

若而

川

右并伊豫白雲寺舊名高橋寺

新寺

素上人新元帝身者後年移之  
而大神社者身年獲一時  
日三町也此寺有  
神名多野

招大郡長為二於三抄

方之抄段及中在也

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

抄段二年二月六日 少部抄段

印

長

長

丁巳年

二月九日 庚申

本年上羊年分學費員會事九月廿一日午前  
第九時ヨリ午後員二時迄三例ノ通本館  
牙二課一派出金本事支社後所發中ノ  
至度御通知有之也

明治十二年二月八日 華族會館

右ノ通ニ達ニ付御通知中ノ尚時附ヲ以テ  
所煩達回尾馬一方ノ區部有之也  
十二年二月九日 萬里路通之啓

中

二月十七日

員五号

去方。副館長投票之要。後野長親  
錫島直大。投票最多。数ニシテ各二十六枚。付  
文ニ来ん。去方。若有人。之。リ。投票。之。条。同族  
下。年。心。上。之。者。本。後。之。時。本。館。之。出。出。所  
投票。方。之。之。也。

此。後。後。中。之。每。度。早。之。以。通。知。方。之。也。也。

十二年二月十日

華族會館

右ノ通ヒ達ニ付以通知申上ル為時附テ  
以テ心順達周尾ニ請方心返却方之也

十二年二月十日

萬里路通房

二月十日  
員五号二号

来ん。去方。元。節。付。場。館。下。賜。之。要。苗。同  
場。之。支。之。付。回。海。之。上。代。料。之。之。也。  
其。能。之。在。代。料。一。族。之。之。不。年。宗。能。之。之。  
之。之。後。之。之。以。之。之。之。之。之。也。

再取レ之

事ノキレハ此カ高ク西ノ領上ノ事  
協定ノ事也 夫レ何領上ノ付料  
其領上ノ付料ノ務カ、  
事ノキレハ此カ高ク西ノ領上ノ事

事ノキレハ此カ高ク西ノ領上ノ事  
協定ノ事也 夫レ何領上ノ付料  
其領上ノ付料ノ務カ、

但中ノ海ノ事ハ他ノ人ニシテ  
事ノキレハ此カ高ク西ノ領上ノ事

万里ノ遠ク出房ノ殿  
方ノ條ト事ノキレハ此カ高ク西ノ領上ノ事

中ノ即チ 經ルニ殿  
日ノ經ルニ殿

長尾 殿 榎 殿





三ノ出三

万里少師道房

中野の冠之助

以所考之類の梅子

六十七株

此種多産一別之をノ集

産する。四月

有室子二千三十一別種多産

産四枚の幼子

石多舞之は亦待下を舞し海に産

トニテは多産所は能く産出する

中ニ井田寺多産之は也三カ

ニ方也

方寸草子

八百里外西房

因寄鷹水部

後兒

中興力能助

身三歸

連年十七日本館二於古指撰翰有族  
長市館藏夏字多院藏夏友師友  
部公無慮者世僅我君子後三時出中  
館之其之度也

西曆十二年三月十二日 副館長 楊雲亭 啟

三自十子

甲子年

并也六四之象也... 直之於道... 昭令土也...

智...



神用て其世に於て神事  
に於て其神は其神事  
乃其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く

惟此山之神也

乙卯年

乙卯年  
其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く  
其神の如く其神の如く

惟此山之神也

此等事... 為之... 字... 者... 不... 為... 可... 誤... 解...  
 之... 對... 字... 者... 之... 之... 是... 由... 由... 臨... 部... 長...  
 向... 強... 之... 自... 出... 之... 者... 之... 此... 為... 為... 為... 中... 力...  
 接... 中... 之... 出... 至... 之... 出... 者... 之... 者... 知...

以... 之... 年... 之... 月... 日... 上... 秋... 之... 年... 之... 意...

力... 之... 保... 之... 年... 之... 月... 日... 中... 之... 力... 也...

十... 年... 之... 月... 日... 高... 聖... 也... 與... 通... 屬...

已... 前... 書... 為... 檢... 元...

中... 局... 力... 臨... 之... 船...  
 檢... 之... 船...

長... 尾... 船... 檢... 之... 船...

三月十七日

甲... 第... 載... 号...

別... 紙... 之... 其... 之... 其... 其... 通... 之... 省... 之... 通...

其... 之... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其... 其...

目... 福... 之... 通... 漏... 之... 補... 之... 正... 急... 之... 事... 之... 戶... 之...

万... 里... 之... 中... 之... 其... 臨... 檢... 中... 之... 其... 通... 者... 之... 其... 也...

以... 之... 年... 之... 月... 日... 云... 之... 其... 之... 其... 之... 其... 也...

日身其五通九身

多事辨、内請、外紀、數、多、事、辨、  
通、却、古、物、亦、所、為、者、向、中、月、後、  
年、通、過、漏、多、補、以、急、南、省、の、事、出、了、  
好、う、お、世、の、事、を、事、也

唯、西、東、の、分、の、形、出、る、と、す、  
而、苗、省、出、降、の、星、截、空、負、然、也、出、張、と、  
中、の、中、に、又、在、東、移、任、の、心、に、  
如、之、宗、沈、亦、各、事、都、又、一、他、而、美

二、五、多、く、も、八、日、福、中、其、方、初、裁、う、る、  
一、多、く、也

甲、三、三、三、

今、解、わ、せ、ら、る、別、紙、の、通、達、也、或、は、  
考、方、様、々、之、を、急、う、お、世、の、事、を、事、也

三、三、三、三、三、  
皆、部、長、出、立、者、也、也

皆、部、長、出、立、者、也、也

華、士、族、多、事、辨、を、事、の、事、  
甲、の、事、の、事、の、事、の、事、  
甲、の、事、の、事、の、事、の、事、





Faint vertical lines, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

甲寅四月

別當の通事部次へ  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季

奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季  
奉季 奉季

十二年三月廿三日  
出各士等...  
拜送...  
是亦...  
也

石...  
十二年三月廿三日

中...  
...  
...

長...  
...

三月廿三日

甲...  
...

今...  
...  
...  
...

十二年三月廿三日

...

...

...

...

之来五二百  
多小初移和  
者之  
甲辰三月三日  
大  
四  
三  
る  
先  
根  
了

公

四月二日

文四号

出  
日  
出  
廿  
中

四月二日

甲子年六月

別録之通武部既ヨリ事四月三日  
神武天皇御在位第百廿七  
神武天皇御在位第百廿七  
其由申之ヨリ事遂之  
四月三日ヨリ事遂之  
其由申之ヨリ事遂之

未月三日

神武天皇御在位第百廿七  
面々大禮始有爾後一ヨリ同日  
参拜之様法違之旨を其  
十二年三月廿六日武天皇御在位第百廿七  
追名石考之ヨリ、子孫百廿七  
と名拜道之末末末末末  
其由申之ヨリ事遂之

甲子年七月

副物多八百十号と通る云日左記  
官内御正行中 有勢地理  
法達言々々々来 各段  
三十二年三月廿九日 副督部長東久世通候

第百八号

官内御正行中 有勢地理  
省智地理 新島

官内御正行

三十二年三月廿九日 官内御正行

官内御正行 三十二年三月廿九日  
官内御正行 三十二年三月廿九日

中

一覽

長

四月九日

今般本銀三枚子船長三  
浪良有子但々月廿九日  
浦一り起子の以し 老四り  
以海儀々々々々々々々々

一冊及び此書と、余の意を以て、  
海軍の十巻と、此中七巻と、  
三巻四日、好館長、  
中  
伴 直字、  
伴 直字、  
伴 直字、

後漢會紀別題

日族ノ同族タルハ、  
術ヲ研精スルハ、  
後漢會紀別題  
日大要、  
術ヲ研精スルハ、  
後漢會紀別題  
日大要、

才起ス、蓋我北軍、  
然レモ概シ自來、  
才世人ニ求メ以テ、  
ス故ヲ以テ、  
キナリ、  
ニナラス人ヲシテ、  
才交換ニ其説ヲ、  
陸濟陸海軍制、  
古礼、  
説カヘキナリ、

是レ天下ノ小ナルニアラス其才之島処ニ在ルヲ  
又テ也唱呼我輩放テ逸豫セズ汲テ中シ之  
ヲ研精セバサニ古ハヲ笑フ可キノ日モ亦アラサ  
ランヤ是為題旨

華族會館演舌會

第一條

演舌者演舌堂一切事務掌ニ幹ス時假  
辭身之ヲ兼又

第二條

演舌者演舌ヲ始ムル片ニ幹事演舌者姓  
名ヲ唱上而メ後ニ高坐ニ追テ演舌ヲスヘシ

第三條

演舌堂ハ本館正堂ヲ以テ之ニ充ツ

第四條

華族一般自由ニ演舌及ヒ聴聞スヘシ

第五條

本館ヨリ問題ヲトスト異氏請ニ依リ華  
族中問題ヲ具シ少ナリハ一週間前ニ幹  
事ニ持出シ許可ヲ得テ後ニ演舌スヘシ

第六條

演舌者ハ勉メテ言語明瞭ナルハ已マテ得  
カレバハ西洋語ヲ用ヒ後ニ其語ノ義澤ヲ  
ナスヘシ

第七條

演舌者ハ政府現在ノ事生存ノ人ヲ誹謗  
ヘハカラス

第八條

演舌者若シ政府現在ノ事及生存ノ人ヲ  
誹謗シ又ハ總衆中ニ道器ノモノアルハ

ハ幹事之ヲ退場セシム

但シ右様時ハ何レノ人ニテモ此レヲ沈黙セシム若シ  
ソレニテモ沈黙セサルハ幹事之ヲ退場セシム

第九條

演舌者或ハ駁論ヲナスハ二人日時ニナスヘカラ  
ス舞臺ノ席ヲ定ムヘシ

第十條

演舌者又ハ聴衆ニテモ威儀端正欠伸咳唾ホ  
都テ場内ノ妨害ヲナスヘカラス

第十二條



聴衆演舌者、敷論ヲナスガハ幹事ニ  
請ヒ許可ヲ得後ニ之ヲ為スヘシ

但シ聴衆ハ演舌者敷論ヲ許スト莫ク演舌  
者ハ聴衆ノ敷論ヲ許サズ

第十三條

演舌者ハ五人ニ過クハカラス

第十四條

本館士民及學智院士民ハ傍聴ヲ許ス

第十五條

本館士民ハ演舌ノ業ヲ許サズ

右各條ニ列載セザルモノ

甲第八号

副館長ハ右各條ノ業ヲ許サズ  
後任ニ付代理解任ノ業ヲ許サズ  
本館員中ニ是等ノ業ヲ許サズ

二十二年四月二日 副館長 吉原 宣之助

美の乃乃ぬぬ  
 言の乃乃ぬぬ  
 有智妙理  
 行有之乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃

乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃

乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃  
 乃乃乃乃

輸也為中重ナル物ニシテ則  
皇太后亦先遊サレ殊ニ奉養衆  
庶ラシテ志致之者、傳習ハスヘリノ所  
諭達ニ付傳習也モモノ敢テ強フルニ非  
ス各系都合治身之事ニ及ル者學藝  
藝道徒手ニ男力廿或ハ未亡人等佛  
子等ヲ奉養、傳習者之有テ公私之方  
以重ク之此事ト存改修中佛ノ有テ  
妙也考慮未レ尚中其人體性ハ佛  
ノ之方クニ存習子ニ當身ニ及ル者傳習也

已事一ニ為修出教人其之見也  
右事一ニ同極一子ニテ善法ニ方其後  
究メ後事一ノ産業メラシメ其ノ中ハ  
為善物立白原之道ニ有テ事ト易者  
一旦亦等資本金ト云事ニ至テモ他如  
水池ニ属セザル方法モ其ノ中ハ是事  
ハ人員ニ定定ニ上ニ協議ニ然ル故一奉  
及申西懐也

士事四自 持り部長 岩倉 岩倉  
徳吉 善山 内所 善山 善山

皇太后聖時

行信之旨

男世一則性業之文云 衣体如キ  
戀う如何様ニテモ其ノ七葉支葉之如キ  
日ノ亦存持考ノ如字ノ四降ノ如キ  
弟也方方六号

皇太后御案思召ヲ以テ先達ニ御儀  
之通御申立未成ノ慶申ニ御定  
之般書心

御所中ニ於テ若君蚕室御建設天葉  
業熟逢ニ若君教若所産入未成

男奉孫中ノ御執心傳習為教之者  
ニ来ルニ其心ノ御守ノ中ニ立成高御達ノ  
昔之振也

十二年四月丁酉 寅月ノ御聖年案別  
通る甲申立書函ニニ再振婦日  
上ノ三書ノ如御男如向レニニ  
若教之者ニ教立不若故ノ人  
若之馬ニ於テ互亦ノ中出如事

今般際  
思召ヲ以テ勅候之也七仲七如事

五月廿五日

五月廿五日

五月廿五日

五月廿五日

四月十日 於部長 与 族長 井 直憲ヨリ 督部長ヨリ 總務ノ旨 別 後ノ趣ヨリ 示サレ 右別紙ニ示スル

皇太后后字西子元御事な一層市前城  
に在りて年来以親戚と方存案以居る  
幾かの<sup>國</sup>國産の一語を始又その<sup>廣</sup>廣に遊  
幸族之昇世を以て御儀傳す  
皇太后御事に事し主たる事とのありけり  
申速に御事此又ありて百城版中<sup>皇太后</sup>皇太后  
御事正年三月十日 皇太后書也天

一戸皇太后御事

室の御事正年御事

皇太后御事正年御事

井伊直書より智知長室御  
一、方別成と題し方御事

四月三十日

一、開拓之説

一、善撫ヲ武事ニ用ユル得夫

有る来九月御事諸君問答に有る

御事に御事に御事に御事五月六

日午前十時迄に御事に出るし

初殿亦獲平一府通出有以勿心  
十二年四月廿九日 被語台旨  
旨由遠方在在好路由遠方已  
出此遠方在在好路由遠方已  
可引清  
井侍正定美  
五年修補不列年補修所也

四月三十日  
第五号

御示被中庭儀者云其朱的百  
年後二所以向者考本館之本  
取者之知也

十二年四月廿九日

德七岩審具視

五月七日

別紙戴通被相達候等御通知申入候得  
會館儀堂借用云之義候御遠存御

會關

御方、来日二十一日迄、私方迄御申出  
被下度有無御申出等々、御方ハ御達  
存無之儀ト見候ニ由答可及、其間此  
段御来知置被下度候也

追石神田迄之會關、設相成共々同区ノ  
御方ニ其情々、傍聴御出席以下  
者古已長澤管徳ヨリ依頼候条也  
段御通知申上置候也

五月七日

井伊直憲

出連右

追石周尾ヨリ、辨込兵可被下候也

七第四號

當局第二課長五辻安仲旅行中副課長  
一等辦事勝部靜男課務代理為致候候  
額課、可差出諸願、窺届書ハ九テ代理  
宛テ可差出此段相達候也

明治十二年五月六日

督部長岩倉具視

第拾四號



神田已長澤管徳（元）額區會開設  
二好本館議事堂借目致之度別冊之  
通申出候願本館協儀之於テハ此度  
之儀ハ差支無之ニ爲貸与スル相致  
候得共一應及御相談候条御見込ニ候  
者来々十二日迄ニ御申出有之度自是日  
日迄ニ御申出無之時ハ御異存無之者ト  
見儼ニ貸与スルキ者澤管徳ニ可圓  
答候此段及御相談候也

明治十二年五月六日 副館長 鍋島直火

華族會館議事堂拝借願

未ル五月當神田區會開設ノ儀ニ付會場ニ當  
ツキ家屋無之寺院或ハ小學校ノ如キ孰レモ  
狭少卑隘ニシテ會場ニ適ニ應スルモノナシ  
ナレ共該學校中畧モ大ナルモノニ補足テ  
加ヘ之ニ用井ントスルモ尚議場ノ體在リ  
備ヘシムル能ハズ且ヤ已ハテ得スシテ之ヲ  
補足スルニ會後畢ルニ至テハコト旧基ニ  
復セサルヲ得ス此ル片ハ臣民ヲニテ多少ノ全

額ヲ後費セシノ亭以テ苦慮四端在リ然ルニ  
當區幸ニ華族會館議堂ノアル在リ而テ  
前陳ノ情実ヲ以テ該堂貸与ノ允許ヲ  
蒙ラシムルヲ仰望ス若シ允許ヲ得該堂  
ヲ拝借シ會議ヲ開設スルヲ得ハ則チ壯業  
完結、若構具ヲ中議員ノ精神ヲ  
シテ自ラ嚴肅ナラシメ隨テ該事ノ體  
裁モ亦其宜ヲ失フコトナリハ是方チ  
華族諸公ノ賜ニシテ實當區議員ノ幸  
福ノミナラズ國臣人民ノ光榮何事也

之ニ如カニ宜御照裁、上該堂貸与ノ允許  
ヲラレコト懇願仕候也

明治十二年四月二十九日 神田區長 澤 篤徳

華族會館長

岩倉具視殿

附記 會場人員ノ概數以下數條録ノ別單ニ在リ

會場人員ノ概數

區長 壹人

一	委員書記	六人
一	議員	廿五人
一	書記	貳人
一	傍聽人	五名
一	給仕	貳人
一	小使	貳人

通計九十八人

但旁聽席ニ餘地アルハ定員ノ外若シ人ヲ許ス

會期豫定ノ日限

一會期ハ五月下旬申子早クモ廿日ヲ以テ  
 開會セントス日數ハ十ヶ日間ノ規定ナレド  
 區會創設ノ後ニ毎議員モイマ夕議事ニ  
 慣熟セサルニ因リ五ヶ日乃至十ヶ日程ノ延期  
 ニ至ル可クヤモ許リ難キ儀ニ有之候

會場開閉ノ時限

一會議ハ毎日午後申五時ニ開設シ第九時或  
 ハ十時ヲ以テ閉場致シ候

器具拝借ノ概目

一器具ハ固ヨリ議堂ニ備置セル卓子椅

新編

今般神田邑の會之為ノ會館設事堂貸与ハ後御照會之類  
了承勿論異存無之候此ハ右邑長申上ノ會期豫定ノ日限書  
末項ニ會場保護ノ為ノ警視ノ應會ニ巡查ニ各出席セシメ候下  
有之右者一般各邑々會ニ於テモ會場取締ノ為ノ查官出張スヘキ候  
規ハ素ヨリ有之間敷候ト相考候間自茲華族會館ノ為ノ區會議員  
ニ於テ此ノ如キ保護豫防有之候事故右一般ノ例規ニ無之ハ巡查出  
張ノ後斷生御斷有之方可然相考候事此段愚意申進候也  
右ノ如キ會館ノ御通知有之度候也

明治十三年五月八日  
族長 井仔直憲殿

中御門徑明

子及ヒ洋燈等ヲ拜借シ其録ハ總テ自  
辭致シ候

一會場保護ノ夕メ警視局ヘ照會シ巡  
査二名毎日出席セシメ候

五月九日

別紙之通館長ヨリ被達候間刺附ヲ以至  
急御廻達周尾ヨリ御返被下度候也

明治十二年五月九日

井仔上直憲

御連名

別紙之通福澤諭吉ヨリ申出候處其言  
剴切就之具視等モ亦深ク思考スル  
處有之候依而御族中御見込有之候  
向者魚御伏藏本月中ニ御申出有之

度候右御見込之處恭考ニ供度申入  
候糸御族中無洩烟々御示談有之度  
候也

十二年五月

編 館長 岩倉 長 岩倉 長 岩倉 長  
長 岩倉 長 岩倉 長 岩倉 長

謹白左右益御清穆被成御座奉拝賀候陳  
者華族ノ事ニ付ニ兼ニ鄙見有之旧主人  
眞平ヲ始シ知人ハ每度談論モ仕候事ナ  
レ正固ヨリ實際ニ着手ノ跡モ無御座方  
度ハ公然書ニ認シ呈上候儀何卒御閑

ノ節御一覽被成下度奉願候尚詳ナレハ他  
日拜謁ノ時ニ付ニ候此段要用而已申上  
候早々預首

二月七日

福澤諭吉

岩倉殿

下執事

尚以華族ノ事ニ付ニハ既ニ明八日弊塾  
演說館ニ於テ愚説ヲ述候積リナレ其説  
ノ大意ハ唯華族ノ内部ヲ獎勵スルノ事ニ  
別紙ノ如ク政府上ニ関スル事ニハ無御

座候此段為志申上候也

別紙壹通華族ヲ武辺ニ導クノ説ハ諭吉  
兼テ鄙見ニ有御覽候御参考ノ一助ニ  
相成候者難有奉存候也

明治十二年二月七日

福澤諭吉

岩倉右大臣殿

尚以同様ノ説一編ハ別ニ認メ山取有朋  
殿西郷從道殿川村純義殿連名ニ當テ  
本日郵便ヲ以西郷殿、呈シ置候

華族ヲ武辺ニ導クノ説

貪利事權今ノ禽獸世界ニ於テ苟モ一國ノ  
社會ヲ成シテ其獨立ノ体面ヲ保護スルニ  
兵力ノ要用アルハ特ニ喋々ノ弁ヲ俟タヌ  
諭吉嘗テ言ヘルニカキリ兵ハ有ル道理ヲ護  
スルノカニ非ヌシテ無キ道理ヲ造ルノ益  
減ナリ此事果ソ今日事實ニ適スルヲ信ス  
論者若シ此ヲ疑セアラハ現ニ各國交際ノ情  
ヲ見テ之ヲ察明スヘシ既ニ兵大切ナルヲ

知ラハ我日本人民モ此ニ注意シテカヲ用ユ  
 可キハ無論ナレモ<sup>元後</sup>賦政ノ許サレ<sup>ル</sup>所ナレハ  
 亦之如何トモス可カラス故ニ今國ノ經濟  
 上ニ於テ大ナル故障ヲ見スシテ苟モ兵力ニ  
 益スヘキモノヨラハ<sup>元後</sup>令其事ハ迂遠ニ似タ  
 ルモ又夕些細ノ如クナルモ漸シテ之ヲ着手  
 セサル可ラサレナリ即チ其事トハ何ッヤ  
 華族獎勵シ兵事ニ氣<sup>元後</sup>凡ヲ養フノ策ナリ  
 抑モ兵ノ事タルヤ元ト人ノ情感ニ生シ  
 毫モ道理ニ基クモノニ非ス其元素ヲ解剖

スレハ唯教棄スルト殺棄ヲ防キ又殺棄スル  
 トハ二箇条ニ止ルノミ故ニ兵制ノ内部ニ入リ  
 其軍律規則ノ嚴刻ニシテ他ノ社會ニ異ナレ  
 モ多キモ畢竟殺棄ノ空氣中ニ止ラ得サ  
 ルノ權道ナレハ兵事ハ都テ尋常ノ道理外  
 ニ在ルモノト云ハ<sup>元後</sup>得ス此道理ノ外ニ  
 在テ最モ行レ易キモノハ大人ヲ欽慕スル  
 ノ氣凡是ナリ凡ソ軍人ニシテ一度ヒ功名ヲ  
 成ス者アレハ其兵軍ノ社會ニテ之ヲ尊崇  
 スルノミナラス世間一般ノ人情ニ於テ之ヲ



忘ル、丁能ハス益之ヲ慕ヒ大人ノ人  
物ハ益六ヲ致シ功名ノ声ハ益集キ恰  
モ破竹ノ勢ヲ以テ拔山蓋世ノ名ヲ成  
シ善ニ其一世ノミナラヌ數十百年ノ  
後ニ至テモ尚其功ニ堙没セザルヲ常  
トス佛帝ヲホレテ豊太閤ノ如キ是  
ナリ今虚心平氣強ヒテ情ヲ冷ニシ唯道  
理ノミニ由テ考ヘナハハ仏帝トテ尤マテ  
非常ノ人ニ非ス豊太閤モ固ヨリ鬼神ニ非ス  
升ルヲ朵明スヘシト虽死如何セシ天下ノ

衆口以テ其人ノ名ヲ成シ其名ハ以テ又其  
人ノ功名ヲ取ルノ器械ト爲リ名以テ名ヲ生  
シテ遂ニ千歳著名ノ大人ト爲リ万世不朽  
ノ家名ヲ遺シタルヲナリ今日仏蘭西ニ於テ  
尚ヲボレテト家名ヲ慕フテ其子孫ヲ奉ス  
ル者甚タ多ク臣民如加ニテモ旧將軍ノ列  
ンドヲ既ニ再撰シテ大統領ト爲シ又近日  
ハ三撰ノ議アリト云フ世界人情ノ移ク所  
以テ知ル可シ  
右之如リ軍人ノ名望ハ殆ト実ヲ離シテ

虚ニ属スルカ知リナレ凡人情ノ赴ク所其  
 虚ヲ以テ実ノ用ヲ為ス凡ハ決メ之ヲ輕々  
 ニ看過ス可ラス。綴密ニ意ヲ着シテ之ヲ利  
 用スルコリ策ノ上ナルモノト云フ可ク。本  
 我日本ニ於テ有ル者。學者多シカラズ有  
 功ノ士人少ナカラスト。虽凡其家ノ名望  
 上下一般ニ普子リシテ。寒村僻邑ニ至ルマ  
 テモ之ヲ欽慕シ之ヲ尊崇シテ。疑フ客レセ  
 ルハ華族ノ右ニ出ル者ナカルヘシ。都會ノ  
 地ニ居リ日新ノ事物ヲ見テ書生流ノ談論

ヲ聞ケハコソ華族モ亦唯一富豪ノ主人ノ如  
 キニシテ甚シキハ。壯卒ニ之ヲ蔑視スルカ如キ  
 事情ナキニ非サレ。凡其之ヲ蔑視スル者ハ所  
 謂都會ヲ見テ地方ヲ見サル者ナリ。日本ノ一  
 部ヲ知テ全國ヲ知ラサル者ナリ。歩ヲ轉シテ  
 旧諸藩地ニ至シハ。今ノ華族ハ即チ大名ナ  
 リ。地頭ナリ。恰モ一種上等ノ人類ナリ。青年  
 ノ書生輩カロテ極メテ罵詈スレ。凡未タ此  
 上等ノ人種ノ名望ヲ害スルニ足ラサルナリ。  
 啻ニ之ヲ害スルニ足ラサルノミナラズ其書

生ナル者カ現ニ己カ旧主人旧地頭ニ對シ  
テ何ノ觀ヲ為ヌヤ議論上ニ於テハ一般ニ  
華族ヲ無益有害ノ者ノ如リ公言シテ一心  
ニハ私ニ其旧主人ノ利害ヲ謀リ某名望  
ヲ保護スルヲナニニ即チ今テ、華族ノ名  
望ハ此私心ノ集リタルモノナレハ必スモ  
寒村僻邑ノ人望ヲ求ソサルモ日新ノ書生  
相互ニ結合シテ華族一般ノ名譽ヲ成ス者  
ニ云フ可シ

華族ノ名望ノ重キヲ斯ノ如シ其事跡ニ顯レタ

ルモノハ一例ヲ舉レハ泰藩以來ノ政略ニテ旧藩  
主ノ勉メテ其藩ノ士民ト令離ンテ地方官ニモ  
勉メテ其土地ノ旧士族ヲ除タル程ノヲナリシカモ明  
治十年西南騷亂ノ際臨時ノ兵ヲ募ルノ一段ニ至リ  
地方士民ハ何人ノ名ヲ稱的ニシテ募ニ應シタルヤ  
諸縣廳百回ノ公布ハ旧藩主一氏ノ諭告ニ若カサリシ  
ヲナラン又當時谷少將カ熊本籠城ノ偉功ハ右今絶  
論ナリト云凡若シモ偶然ニ此少將ニシテ三百年前  
長篠ノ城將貞平九郎歟伏見ノ城將島井元祿  
歟又ハ高松籠城ノ援兵毛利兩川ノ子孫ナランシノ

ハ今日世俗ノ所評ニテ谷少將ノ声價モ一層チ  
増シタルナラシ右ノ次ヲ以テ論者敢テ華  
族私スルニ非サレ兵ニ急ナル國ノ為ヲ謀リ  
談族固有ノ名望ヲ利用セシテ欲スルニ即  
チ之ヲ獎勵シテ兵華人ニ凡ヲ養フノ策ナリ此  
策果シテ遠ナル歟此油ナル歟讀者ノ判断ニ附  
スルニ其方法ノ大略ハ

兼テ所聞ノ如ク華族 朝廷ノ藩屏ナルノ旨ヲ  
以テ華族會館ノ設テアルナラシ固ヨリ至  
當ノ職分ナレハ今日ヨリ此旨ヲ擴メ談族ハ

兵事ニカヲ尽シテ内ハ 朝廷ヲ保護シ外ハ  
外患ニ當ルモノト覺悟メ尊テ兵書ヲ讀ミ兵  
事ヲ講シ現ニ海陸軍省ノ官途ニ從事スルト  
否ニ拘ハラズ一族ヲ拳行一社ノ講武會ニリタリ  
クラゴトト為シ積金モ武ノ為メニシ叢財モ武ノ  
為メニシ榮辱死生其期スル所ヲ武也ニ定ムル  
又國法ニ於テ華族ト平民ト尊卑ノ別アリ國  
民ノ權利ヲ平等ニスルノ主義ナラス華族ノ名  
ヲ設ルモ固ヨリ無益ナレ既ニ族名アリ又階級  
特典アルモ之ヲ妨トスルニ足ラズ故ニ今華族

ニ限リテ徵兵ノ法ヲ殊ニシ談族ノ子弟ハ國ヨリ  
兵役ニ服スレ兵之ヲ兵卒ニ用ヒスミテ海陸  
軍ノ士官學校ニ入シ最初ヨリ士官ノ技術ヲ教  
ル事但其久校ノ年數及ヒ免役ノ金額ノ如  
キハ都合ニ由ル可シ又士官學校ニテ卒業シ  
ル者定規ニ於テハ少尉補タル可ク華族ニ限  
リテ上等ノ官位ヲ與ヘ以テ其族ノ榮譽ヲ  
表スル事但榮譽ノ官位ニハ相當ノ俸給ニ  
且實際ノ軍事ヲ執ラシムルモ對兩アル  
可キ事

右ハ何レモ華族ヲ兵事ニ獎勵シテ望ヲ抱カシ  
ハルノ法ニシテ人民一度ヒ前途ノ望ヲ抱キ之  
ヲ養フキハ其進歩モ亦自ラ速ナルモノナレハ  
族中次第ニ人物ヲ生シテ海陸軍上流ノ將  
校タル者モアラシ既ニ官途ニ地位ヲ得テ  
之ニ加フルニ平素其家ニ屬スル固有ノ  
名望ヲ以テス下流ノ兵卒ハ無論世間一般  
ノ人情ニ於テ之ヲ欽慕尊崇スルヲ國ヨリ  
疑テ容レズ即チ國ニ名將ヲ生スルヲナリ  
ハタル天下ノ事實ニ於テ良將ノ良ハ名將

ノ名ニ差カサルモノ多シシ社會ノ人情ヲ  
解スル者ニシテ始メ其味ヲ知ルヘシ聞ク  
亞米利加ニテハ宗教制全ク自由ニシテ  
官吏ニ撰フニ其宗門ヲ問フナシト雖凡  
唯武官ニ限リ司事シ古教ノ名ニシテ彼ノ國ノ人ノ宗  
ノ常ニ嫌惡スルモノ  
凡ニ屬スル者ハ彼令ト如何ナルヤ幹事ル  
人物ニテモ之ヲ採用セスト云フ蓋モ亦タ道  
理ニ拘泥セスミテ人情ノ向フ所ニ從ヒモ  
ノサテシ  
又所論ノ點ヲ異ニシ華族ノ名望如何ハ姑

ク之ヲ捨テ、問ハス唯其家ニ屬スル財産ニ  
ニ就テ之ヲ見ルモ決シテ容易ナラサルモノナ  
リ今該族ノ祿券ノミニニテモ既ニ三千万円ノ巨額  
アリ之ニ加ルニ家々ノ私畜ノ財産ヲ以テセハ  
實ニ驚ク可キノ資本ナラシ此資本ヲ有スル  
主人カ其力ヲ兵事ニ用ルト之ヲ傍觀スルト  
ノ利害ハ多弁ヲ俟タスシテ明ナリ今華族  
ヲシテ講武護國ノ責ニ當ラシムルノ方法ヲ  
得シハ其所有ノ資本ハ間接ニ護國ノ資本  
トナリ年々歳々政府ノ會計外ニ幾分ノ

賤ヲ國用ニ供スルノ姿トナルヘシ是亦偶  
然ノ利益ナレハ此利益ヲ買ハシカ爲メニ政  
府ニ於テ妨ナキ部分交ケハ華族ノ爲ニ特典  
ヲ設ルコリ上策ト云フ可キナリ  
又一方ヨリ論シテ華族ノ爲メニ謀リテモ專ラ  
武ヲ講スルコリ上策ト云フ可ケレ今ノ華族中  
ニ學問ヲ勉強スル者甚タ少カラズ法学ナリ  
理学ナリ其志ス所ハ養ハ則チ養ナリト云  
凡都テ人生事ヲ爲スニ本来無キモノヲ造ルハ  
既ニ有ルモノヲ利用スルニ若カヌ方今日本ノ學問

世界ニ於テ後進ノ輩カ法学理学ヲ研究スルハ  
何レモ皆ナキモノヲ造ルノ道ナリ此道場ニ  
於テ共ニ其進歩ヲ爭フハ華族平民モ區  
別アル可ラヌ双方相互ニ拮抗シテ並ヒ進ム  
ニ結局并行ニ過キヌ就學成業シテ社會ニ  
事ヲ爲スノ日ニ至リテモ僅ニ平等ノ地位ヲ  
得ルニ過キヌ況ヤ華族平生ノ生活豊ナルニ  
過キ之カ爲ソ却テ文心ノ培養力ニ乏シク  
シテ尋常ノ學生ト鋒ヲ爭フテ能ハサル  
者モ尋常ニ於テ力ヤ必スシモ學問ノ実力ニ

テ又別ニ依頼スル所モ、兵カレ可カラサルナ  
リ其依頼スル所ノモノトハ何リヤ尋常ノ  
学生ニ求メテ得ヘカラサル旧大家ノ名望即  
是ナリ此名望ヲ用ヒテ実益ヲ為スヘキ處ハ  
父ニ在ラヌシテ武ニ在ルノ理由ハ前既ニ之ヲ  
述ヘタリ故ニ華族ヲシテ武ヲ講ニ兵ノ慣ル  
ハ國ノ為ニ益スルノコトナラヌ一家一身ノ為ニ大ナ  
ル利益ニシテ既ニ存スル固有ノ実ヲ利用スルノ上策ト云フ  
可キナリ也論果ニ是ニシテ其利果ニテ利ナラハ  
華族ハ政府ノ議政行政ボノ事ヲ暫ク度外

視シテ講武護國ノ一方ニ身心ヲ委子後進ノ  
少年普通学ヲ然リタラハ兵学ノ専門ニ入り兵  
書ヲ讀ミ兵事ヲ談ニ集會ニモ武人ニ交リ遊  
戯ニモ武器ヲ弄ヒ尚細ニ且レハ馬事人カ車  
ヲ療シテ必ス馬ニ騎シ郎内ニハ射撃場ヲ築テ  
火器ヲ習用シ道場ヲ開テ劍術柔術等ヲ  
研究シ遠馬遊獵砲等純然タル武人ノ一社  
會ト為シ社中或ハ花柳ニ戯レ凡月ニ耽ル  
カ如キ柔弱的ヲテハ之ヲ擯斥シテ共ニ奮  
セサルノ元凡ヲ養成スルニ至ラハ華族ノ



権勢 今日二百倍ニテ日本国中ノ一大勳  
カタル可キ智者ヲ俟タスニテ明ナリ但ニ  
華族ノ中ニモ家産ノ厚薄アリテ必スモ一  
様ノ器ニ行ハシサル可モアテテモ一  
ニ就テハ別論ヲ要スル虽凡威ハ祿分ノ多  
寡ニ依リテ族中ニ階級ヲ定メ某級以下  
者ハ強ヒテ之ヲ講却ノ社ニ加入セズ又々  
徴兵ノ特典ヲモ与ヘスニテ其代リトシテ富強  
營業ヲ許スル士族同祿ニスルモ可ナリ  
其細密ハ政府ノ條ニ在ルナレハ爰ニ

之ヲ云ハス

明治十載年二月七日

福澤諭吉記

五月十六日

明治十二年五月

読法會の題

一 開板ノ説

一 林市道原社ノ得來論

一 畏懼心ノ起ルハ何ニ基ル乎

一 農商兩獲カ論

吾輩は天下無事を成すに非ざるを得

西園... 乃... 之... 存... 於... 心

三年... 月... 日... 年... 秋... 序... 錄

其... 通... 一... 之... 道... 亦... 有... 以... 通... 志... 乃... 於... 以... 其... 心... 之... 同... 是... 乃... 以... 通... 志... 乃... 於... 以...

井... 印... 錄... 卷... 二

西

三

卷

右... 井... 仔... 乃... 古... 刻... 錄... 卷... 二

西

右... 自... 古... 不

西... 乃... 通... 志... 乃... 於... 以... 通... 志... 乃... 於... 以... 通... 志... 乃... 於... 以... 通... 志... 乃... 於... 以...

井... 印... 錄... 卷... 二

西

三

卷

甲子年七月

皇族中、菊相之法、以尊皇、  
之者、取調、之、在、出、言、別、弟、  
三、為、取、立、言、  
七、書、取、取、取、取、  
由、結、取、取、取、取、  
十、三、取、取、取、取、  
可、取、取、取、取、  
田、一、取、取、取、取、

皇族中、菊相之法、以尊皇、

皇族中、菊相之法、以尊皇、

皇族中、菊相之法、以尊皇、  
之者、取調、之、在、出、言、別、弟、  
三、為、取、立、言、  
七、書、取、取、取、取、  
由、結、取、取、取、取、  
十、三、取、取、取、取、  
可、取、取、取、取、  
田、一、取、取、取、取、

皇族中、菊相之法、以尊皇、

皇族中、菊相之法、以尊皇、

五月廿四日

甲第拾號

吹上御苑拜觀之儀明二十四日ヨリ當  
分ノ内被差留方官内者ヨリ達方  
之儀案此方後移申一ノ通達既  
形云々云々  
百餘年云々云々云々 別書云々  
云々云々也

別出云々

井作云々云々云々 井作云々云々  
井作云々云々云々云々云々云々

五月廿四日

甲第拾號

家城妙令代理大出池官城川為  
義事ノ漢和産云々云々云々云々  
用ノ通達云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々  
井作云々云々云々云々云々云々



廿六日

本月一日申能割五日片三原能配載  
之通より廿十日丹多あきと為し法本能  
まじりて海よりあきと為し中一由海通也  
まじりて海よりあきと為し中一由海通也

十二月廿九日廿九日 辛酉年 能

あきと為し海よりあきと為し中一由海通也  
あきと為し海よりあきと為し中一由海通也

百五十五也 井向生 宝

右船中一高年竹園知也

才少辨

本月一日申能割五日片三原能配載  
其城よりあきと為し海よりあきと為し中一由海通也  
十二月廿九日廿九日 辛酉年 能

抄紙送符

中内山能也

方

字習院實之為名也給之為用之端  
要修德信也其在中也福也  
其在中也福也其在中也福也

三月廿七日 華談會館

別集

丹何直

古事記

六月三日

此後中 父儀のくし家乃法書  
弟の後子。正午之座。此書及  
有く之也

此らと女子保名也此書及法書  
ク

十二月 六月三日 櫻長岩倉名是記

中

印七

此書所記之事實，係由作者親歷其事，故其記載之詳實，非他書所能及也。其間雖有若干疑難之處，然其大體之真確，則無疑義。此書之出版，實為研究中國革命史之重要參考資料也。

中國革命史

華族會館





明治二十五年一月一日

東京五國立銀行

一 銀行の設立

一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立  
一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立

一 銀行の設立

一 銀行の設立

一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立  
一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立  
一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立

一 銀行の設立  
一 銀行の設立

無邊は道あり

一 亦も兼て代る事ありて人ノ心ニ自  
在の場一臨する事ありて我は佛の心あり  
但たの日なり

一 傍に下にてありて我は佛の心あり  
し事

但たの日なり

一 亦も三事ノ心ありて我は佛の心あり  
亦も佛の心ありて我は佛の心あり

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

亦も佛の心ありて我は佛の心あり  
佛の心あり

亦も佛の心あり

井伊立書

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

一 亦も佛の心ありて我は佛の心あり

十二年の事 井伊立書

古井作所事...  
中長...

明治十二年七月<sup>廿六</sup>日 詔 詰 詔 會

一 教法、全國一法ト爲ス(キ平)

一 文武ノ統

一 人間ノ親樂ハ何ノ心ナシト爲ス

名ニ度告其年様中ニ無淺至意出通

有ニ及也

十二年六月廿九日 華盛會館

古<sup>ニ</sup>通<sup>ニ</sup>致<sup>ス</sup>年<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup> 致<sup>ス</sup>年<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup> 致<sup>ス</sup>年<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup>

名<sup>ノ</sup>出<sup>ル</sup>教<sup>ノ</sup>同<sup>ク</sup>免<sup>ル</sup>ナ<sup>リ</sup>ト<sup>シ</sup>テ<sup>モ</sup>也

古<sup>ニ</sup>及<sup>ス</sup>也 井<sup>ノ</sup>仔<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>

古<sup>ニ</sup>及<sup>ス</sup>也 井<sup>ノ</sup>仔<sup>ノ</sup>意<sup>ニ</sup>

本<sup>ノ</sup>為<sup>ル</sup>年<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup>課<sup>ス</sup>者<sup>ハ</sup>可<sup>ク</sup>通<sup>ス</sup>安<sup>ク</sup>仲<sup>シ</sup>也

副<sup>ノ</sup>課<sup>者</sup>一<sup>ニ</sup>年<sup>ノ</sup>旨<sup>ヲ</sup>支<sup>ス</sup>腰<sup>部</sup>靜<sup>用</sup>之<sup>課</sup>也

代<sup>理</sup>課<sup>者</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>旨</sup>日<sup>俾</sup>忘<sup>課</sup>也

故<sup>ニ</sup>其<sup>旨</sup>在<sup>テ</sup>代<sup>理</sup>者<sup>ノ</sup>申<sup>出</sup>ス<sup>ル</sup>旨<sup>ニ</sup>也

其<sup>旨</sup>通<sup>ス</sup>知<sup>ル</sup>可<sup>ク</sup>致<sup>ス</sup>也<sup>也</sup>

明治三十年六月廿七日

副警部長東久世通経

右の通り送るは通経知生り案子して小通経  
りり多敷周屋りり出通却りり下り也

三十年六月廿八日

井俣真憲

中務所経之殿

小通経表

右井俣真憲知生り案子して小通経

先般渡辺洪基より此の院次長補の院長と云う様恭  
學子別請規則別冊の通り有様と云うは是觀に於ては同族  
學子別適當之者ト思考し海共抑教育に歳人生不之欠  
必要に備へる右位に於ては可否厚考熟考し其異見に備へ  
し無事遠慮中より及其上集會可及し其後以別  
此別規則去部宛書廻しに以て是の年額七万圓に金高  
至ては現今可懸る月途にせし海共當分の恩賜金并  
此の資金及右部所屬金運轉潤利金等合して金三万圓

以下入費之支給ニ未レ七月ヨリ善向ニ移レ事ヨリ漸次着  
手ニ致シ追々整頓ニ随ヒ余金額ノ儉ハ他日同族協議  
ニ及ヒ不遂候ト好イ案是亦併セテ及馬相致リ也  
追テ馬異見有之方ハ未レ八月八日追テ書面以テ會館馬  
申出有之度及以同日追テ馬申出有之方ハ馬同意ト云  
ハ但馬異見有之方ハ集會馬申出有之儉ハ追テ日限  
及馬業日也

明治三十一年八月廿九日

華族會館副長 鍋島直大  
華族會館長 山本倉具親

中馬内經之叔 各通 別冊七部宛送

七月二十一日

以テ本年秋ハ馬申出候以テ之度  
申出有之方ハ未レ八月八日追テ書面以テ會館馬  
申出有之度及以同日追テ馬申出有之方ハ馬同意ト云  
ハ但馬異見有之方ハ集會馬申出有之儉ハ追テ日限  
及馬業日也  
追テ馬異見有之方ハ未レ八月八日追テ書面以テ會館馬  
申出有之度及以同日追テ馬申出有之方ハ馬同意ト云  
ハ但馬異見有之方ハ集會馬申出有之儉ハ追テ日限  
及馬業日也

中馬内經之叔

井河直實

美門

考鹿

右并伊丹の下の到事坊御以

七月十六日

今般米國海物大博士東京大學

教授モールス氏ヲ本館ニ招請ニ在

之題案ヲ講述致候東京大學子理海子

吉口譯 右者新説奇聞ニシテ學子

術上裨神不少候様因族一般不諳男

廿一日刻之通リ毎午前八時

市来館能開相成交候也

明治十二年七月十六日 右安藤今波

講題并日割

一 動物成長、怪異 七月廿日

一 蟻ノ奇トシ習性 日廿一日

一 人生ノ原由 日廿四日

一 日本ノ古人種 日廿五日

古

右郵便三三九





女の林を

はあ、うう、と云ふ子付の、  
し、神、入、以、者、第、一、法、也、  
ゆ、を、の、ち、の、月、夜、三、時、  
以、ま、抄、電、く、心、入、第、一、  
大、原、法、書、云、ゆ、如、  
う、り、也、  
井、澤、也、

若、所、  
若、所、  
若、所、

辰日百

本年下中、方子、の、学、次、具、金、  
午、未、月、八、日、同、二、日、  
本、法、中、四、深、法、也、  
出、核、中、一、  
辰、也、

二十、  
乃、  
あ、  
う、

井田小澤

下

下

下

下

右并序石小初得手紙

下

下

下

督部長岩倉具視

京都府士族押小路師親後別紙  
写中...也。以持旨今般華撰被列  
多系此旨華撰一因之可也達就于  
以是迫華撰勅諭其仇當有  
達書類奉人相達道守為被  
行相可取計此段相達何書

明治十二年七月六日

宮内卿德大寺實則

押小路師親

持旨可以了萃撰之被列他事

押小路所親

釵從五位

右通中曰

宣下相成候間為清心得及傳

通達候也

十二年七月廿六日 太政官書記官

宮内書記官清中

別紙之通宮内御了彼達候衆  
此旨誤撰中、可致通知此股相  
達候也

明治十二年七月廿日

督部長岩倉具視

右之通、彼達候間御通知及候也

八月二日

井伊直憲

右井伊治上到未為候事

一〇〇人

和儀去儿七月十七日

皇太后宮辭馬縣下前洋香深

溫泉

行啓供奉

仰付出立致除屠昭五日歸京

仕候間世段申入候也

明治十二年八月六日

萬里末路博房

右井伊殿到來勸修寺廻石

八月六日

本月四日冰川神社主典様

帯仕様以月英後沙風神申上

此也

芝小路為刻

右勸修寺殿廻石

八月十三日

本所様之内三喜馬村の等修業

志強五之四元有之好身中内南

願立同者月陸軍者一照會



美濃軍馬、射的之處、山  
邊、夜、在、未、時、限、  
地、詳細、成、市、立、子、  
乃、軍、馬、之、決、定、會、名、  
此、の、日、定、也、也、

三年八月、陸軍御西御流り

宝也御待り、  
方書、通、直、名、之、如、有、此、

通直、因、  
御

井伊直憲

井伊直憲

井伊直憲

辨是秋果、  
其、能、者、信、  
備前國岡山、  
其、能、者、信、

備前國岡山、  
其、能、者、信、  
備前國岡山、  
其、能、者、信、

明正德十二年八月十三日

池田茂政

右池田殿所刻素壬生殿廻久

二月十日

學子習院男女中少學子生方試書  
表其有取之也海邊坊東寺  
銘長一尺五分七釐  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之  
其書之因常錄之

卷五  
井河氏  
乙第八號

華族之御系系馬射的等修業志第  
向右姓名書取錄之於九月五日  
可指出也  
中界係之儀  
於之取扱及損撤合是及有書姓名書  
向局之書出之及九月五日





之有之候様致度依了別冊相添此旨申  
入候也

十二年八月十五日

岩倉具視

岩倉殿、到奉奉修寺務廻久

乙第九號

當局第二課長五辻安仲具申休職中旅り  
候付一等兵車務部勤男課務代理方殿  
候付該課口可也等諸預伺届出候に代理家  
可也等此旨申連致也

十二年八月六日

副警部長赤久世通禱

右に連り連り致り候旨申連及に候周尾り  
候返戻致り度致也

明治十二年八月六日

井伊直憲

上相殿、到奉奉修寺殿廻久

甲第九號

別紙之通宮内御り申連致条以旨候様申口  
可致通旨候申連致也

明治十二年八月七日

警部長岩倉具視

第九號五拾六号

第五部之長

治五位山内豊之珠

右之者第五部之長所免按奈以版打道按也

明治十二年八月六日 宮内御徳大寺御刻

追手宮内省法用掛毛所免按我之有之按奈以

版打道打道按也

所免之通り 所道按二付法通者之乃按当在

所免之通り所道通同尾 所免之通り所道按也

明治十二年八月六日 井伊直寛

井伊殿 到奉 奉修寺 解 興

第六号

本儿九月六日 法活多問題之者ハ世子延

舎来来所免之通り問題出用所同五

也 所法按中 所通者免之者也

問題

一 所法ハ世子一法ト云ハキ

一 及武之況

一人間之款樂ハ何ヲ以テ知一ト云

十二年八月六日

善按云按

右之通達於其付法道達之  
条、何之通法道達回尾之通達邦  
可之通達也

八月辛酉 井伊直憲

右井伊殿 到書之廟修寺殿 回入

右之通達於其付法道達之  
事、何之通法道達回尾之通達邦  
可之通達也  
右之通達於其付法道達之  
事、何之通法道達回尾之通達邦  
可之通達也

井伊直憲

印

美

右之通達

右之通達於其付法道達之  
事、何之通法道達回尾之通達邦  
可之通達也

甲第拾六号

別紙之通達、官内御前、右之通達、各付、右  
候、換中、右之通達、可、右之通達、何、右之通達、也

明治十三年九月廿四日 智教長 岩倉具視

作三日前八時十二分 着任形取之少年 白  
明降 証を授けて三付 日方三三之内宮内中  
系 賢之は馬道三付 けあお道

十二年九月一日

差枚郵便三ノ俣

習熟 長岩 倉具 視

乙第十号

用弓第二課長五过 あり仲 務し中一等  
年事 楊部 頼男 弓課 務也 程 務 務 務  
再 受 得 事 出 日 右 代理 務 解 務 務

該 務 中 弓 務 あり 務 務 務 務 務

十二年九月一日

副知事 部長 務 務 務 務 務

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

井 何 務 務 務

九月三日

一 本年 度 行 務 務 務 一

一 別 通 歩 務 務 一

名并何處一團圓之海也

九月

兼於學習院內每月曜日午後三  
四時より華族中有志者相集り  
言知縣共飲馬肉辰踏ヲ招テ佛法精  
理ノ講義相傳者ト爲テ付有志者  
ハ隨意法牙館在事度旨有旨申  
り申出多事難事如教中ト云

知事年度也

九月四日

華族牙館

雜事

市紙之通下 寺館より 達其及  
思達其為同 尾方 志近 邦社 寺

井伊直憲

五知何寺也

のりりり

一書の習治一年製

之書

名長海子編福ふと共何所ふと事

ありり

甲第拾六号

別紙之通り宮内御事新達之書付

多候様申之通り方段付順書事

明治十二年九月八日智教長岩倉具視

別紙

華族位四位 四條隆平

宮内省御用掛新達付文奉

但立野官之準之取扱様事

右 田 人

第五部 長新達付文奉

右之通り奉日新達、条法順和達

様也

十二年十月五日 宮内御使丹寺方奉行

新文之通り新達之付及通り奉人

与多新達順達同尾事、此迄迄新

下度様也

十二年九月廿九日 井伊直憲

右勸條寺殿古興久

甲寅拾九号

別紙之通宮内御事御達候条此旨  
該揆中可致通知此殿相達候也

十二年九月廿七日

督部長岩本

皇子御命名嘉仁卜祓命明宮卜奉称

此殿相達候也

十二年九月六日

宮内御德大寺宣刻

前書之通御達了旨速通方上疾

名取字數御達苗圃尾御達

送上委也

十二年九月廿三日 井伊直憲

右勸條寺殿古興久

九月十五日

辰御達承御達承御達承御達承御達

十日祭執御達任御達執御達任御達

十日祭執御達任御達執御達任御達

十日祭執御達任御達執御達任御達

十日祭執御達任御達執御達任御達

十二年一月十四日

甘雨寺藏書

好公陳八私牙直達後兼了私語上果

必田字了結其受昨十四日物約時時以此後

涉後方時 官法手教寫以順達馬回尾可

涉返部能下度也

十二年一月十四日

井伊直憲

右勸條寺藏書 廻天 聖國

九月廿日

*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

別紙之通 宮内御手秋季繁

考梓之通 皆之候条唯白松津

可動通 急出臨如手也

考言知也 智部志 為原月去致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致

考也 亦三言 秋季繁 亦下致



入右、右、右、前右、外、反口、  
出左、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、  
同上

三年九月十日。官內鄉德多事案如  
匪三不急低苦。一、別股局出右、右、右、  
右、右、右、右、右、右、右、右、右、右、  
取像別、通、沙、水、定、回、虎、耳、沙、返、  
却、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

### 井伊直家

三年九月十日。官內鄉德多事案如  
匪三不急低苦。一、別股局出右、右、右、  
右、右、右、右、右、右、右、右、右、右、

### 第三十號

末十月四日。禮語會問題。夫、夫、夫、  
月、中、及、廣、告、至、後、存、存、題、三、此、條、款、  
旨、族、中、以、通、通、出、長、長、長、長、也、

十二年九月十日。華族會館

### 第三十一號

三年九月七日

姓、幸、紀、念、也、如、商、號、等、付、祝、宴、也、并、  
此、條、戶、至、各、位、若、三、戶、至、心、系、也、并、  
一、隱、居、場、子、孫、之、內、各、人、同、日、年、換、一、

牙叔(紅)

斗(紅)

多望隆の御殿に親臨しりる後ルヲ  
以テ死念の法道ヲ示キ  
之恩の徳~~心~~如~~心~~懐~~心~~子ノ身隆~~心~~ヲ祝  
セリト程ヲ依テ幸リ可~~心~~度~~心~~の時~~心~~未  
暇~~心~~アリ~~心~~ト~~心~~云~~心~~フ

三年十一月

轉~~心~~子~~心~~様~~心~~ニ~~心~~由~~心~~

華族會館

時亦未歸者之類也

但旅中或人所勞苦之類也  
夫亦三日中本體法通刻者之類也  
五也

有旅中已無慢法通者之類也

十二年九月廿七日 華族會館

別紙之通 亦達於付法通部中平之早

之法順達 周尾之法返却亦之友

也

九月廿八日

井伊直憲

右井伊殿 刻本勸修寺殿 作通

十月

二十

廿七

三 里 性 之 奉 報 之 祝 儀 之 類 也

以 三 祀 念 之 法 返 之 類 也

之 恩 之 儀 法 之 類 也 身 隆 之 祝 也

卜 祝 之 儀 之 奉 日 午 後 之 奉 報 之 類 也

十二年十月

廿七

乾子

乙卯拾壹号

第四部之長上杉茂憲義引  
同部事務第廿部之長山本隆平  
事務第廿部之長防通吉也

明治十二年十月三日

別部部長東海通禎

前書之通 於此  
手形法因意周尾 引 決此通於下  
序如也

十二年十月四日

井伊直憲

右井伊直憲 勸修寺務

十月十四日

甲寅抄

別紙之通 富内郷 神嘗祭  
儀禮達於此者 族中之可  
此其也 達於也 情新長岩名是視

十二年十月三日

九月十七日 神嘗祭 付有佐華族  
於曉着 用午前十時三十分 至午後二時  
迄 參拜 於此 達可有之 於也  
但參拜 道節 似皇居 通用可也

水に斟中仕切ワヲ乃在局口門前外  
邊にテ出立に順路買所に歸路に

十二年十月廿日

宮内御徳大寺実則

遊多ふ参る節去別 昭徳山 子好也

去ル十一日族長會に節岩名智部長出席  
外紙書取テ以テ免 除テテ有 以通字  
は九当あ物をとの集會に備テ有テ節  
具陳一の比、以子教之を得テ早之は眼  
周尾早、以通是下、深也也

十二年十月廿三日

井伊直憲

恭々惟ルニ

聖上裁カ華族ヲ眷顧寵遇シテ何レ億渥

ナル明治八年十月七日

龍駕親シク裁カ會館ニ幸シ宏 寔壯ノ家屋ヲ賜

ト同九年丑月廿三日又特旨ヲ以テ部長局ヲ被置

続テ学校ヲ設ケ学習院之号及ヒ學資金若干ヲ

賜フ親諭奨勵至ササル所ナシ具視不肖ナル之上

ハ聖旨ヲ奉シ下ハ諸君ト相磨礪シ以テ

聖恩ノ万一ニ報セント欲スル者茲ニ四年諸君モ亦奮

勵從事シ同族ノ光榮ヲ登揮スル者歎シトセス  
只憾々ヲクハ四民ノ上ニ位シ之カ標準タルノ身ヲ以テ  
或ハ品行蕭ナラス家道廢ハス生計理セス施爲一  
夕と**其**當ヲ失ヒ百弊從テ興リ身ヲ辱シメ家ヲ破リ  
世ノ嗤笑トナル者比々踵ヲ經クノ勢アリ具視日夜憂  
苦シテ措ク一能ハス思フニ我同族ノ生計ニ疎ナルハ田習  
ニ因依シ世故ニ迂濶ナルニ由ル實ニ憐愍スヘキヲ以テ百方  
焦慮保護ノ術ヲ設ケ明治十年金六拾万圓ヲ宮内省ヨ  
リ恩借シテ之ヲ衰頹ノ家ニ分貸シ其負債ヲ償還セシ  
メ以テ敬言省自新ノ道ヲ開ク何ソ料ラシ今日ニ至リ

猶其轍ヲ改メス過分ノ負債ヲ起シ不測ノ患宮  
ヲ招キ終ニ訟庭ヲ煩ハスモノ往々之アリ是レ思ヒ担ヒ  
惠ニ習ヒ部長局乃ヒ其宗親族ヲ恃ミ以テ此席取  
ナキノ事ナキノ事實ヲ履行スルノ難キハ飢ヲ忍ヒ渴ニ耐ユル  
ノ比ニ非ラス哉同族人民ノ上流ニ位シ輕暖肥飽  
ヲ事トシ電モ勞苦ニ習ハス此革新變西遠ノ時ニ  
會ス勉テ自ラ奮勵シ凡ソ辛艱ノ復身自ラ之ヲ  
掌試シ宴安ヲ遠クル鳩毒ノ如クシ甚家道ヲ  
整肅シ其子弟ヲ督責シ儉素ヲ本トシ以テ素  
養スルヲナクシハ独リ身家ヲ保全シ訟ヲ院キ債

ヲ清ルルヲ能ハサルノミナラズ何ヲ以テカ國家ニ報酬  
シ祖先ヲ榮耀スルヲ得ン自今以後天災非  
常ニ罹ル者除險クノ外其失誤ト故造トニ因テ自  
家ノ敗覆ヲ致ス者ハ宗親兩族及ヒ各部長モ亦  
願情ニ拘ヒ小惠ヲ施シ之ヲ救済スル莫ク事務  
法律上貴賤平等ノ主義ヲ保タシメ之カヲ藩防ヲ  
設テ以テ聖旨ノ在ル所ヲ奉体シ優遇ノ萬一ニ對  
揚セシメトス具視不肖ト雖モ身督部長ノ任ニ  
膺タルヲ以テ敢テ諸君ノ爲メニ一言ス亦已カラ得  
サルノ波女心ノミ諸君幸ニ之ヲ諒セヨ若シ更ニ意

見アラハ心打ヲ吐露シ披示セテレニテヲ希望ス

明治十二年十月廿日 督部長岩倉具視

右井伊野右刻奉勸修寺殿々御意也

十月廿日 兼外

第四部々長上杉茂憲伯母死去ニ付  
忌引中第四部々長四條隆平同部  
事務兼勤候處除服出仕被仰付  
候ニ付右兼勤相解候此旨旗中ニ可致  
通知此段相違候也

明治十二年十月廿日 督部長岩倉具視

右ノ通リ被達候旨及御通知候早々  
所順達旨御手數周尾右ノ通リ所返  
却可被下候也

十二年

十月廿五日

井伊直實

右井伊直實刻事勸修寺殿在色  
過般及送呈候本院第一年報中永井  
直哉ヨリ金百円寄附ノ旨記載候處  
右ハ永井直諒ヨリ寄附相成候義ニ  
有之全ク植字ノ誤謬ニ候條此旨御  
承知相成度候也

十二年

十月廿一日

學子習院

去ル十八日當院開業式  
天皇陛下兩皇后宮親臨之二週  
紀年ニ付聊祝酒ヲ呈度御差支无  
無之候少、同日午後一時ヨリ御書院  
被下度此段及御案内候也

十二年

十月廿五日

學子習院長立花種恭



今般副館長紹篤直大分醫者多用  
夏之并辞表之るも出候案未之也下  
右新之及扱西帯撰舉一施之し書  
口様丁年一筆之志申後一時東  
館者西帯五之て交申出於申一也無  
濃之申之申海也之申也  
十二年十一月廿二日 華族舎ノ館  
右之也達之て之申之申之申之申  
右之限之申之申之申之申之申之申  
申田津(岡庵)之申之申之申之申之申

十二年十一月十七日 井伊直憲

右一様申連之者

十月廿四日

副館長紹篤直大分醫者多用  
夏之并辞表之るも出候案未之也下  
右新之及扱西帯撰舉一施之し書  
口様丁年一筆之志申後一時東  
館者西帯五之て交申出於申一也無  
濃之申之申海也之申也

右之申之申

華族舎ノ館

年東病... 卷生... 時... 西... 邦

宗... 清...

前... 通...

四... 十三年... 井...

井... 井...

十月廿四

當... 中... 也... 何...

另涉款中可學由公去其一人也

副署致志之在由建結

坊名漢河甲子年一系都志台在越  
坊留守中副署部在車之世  
諸向勞代理之知系坊名漢  
核中一可致由不知坊名漢

光緒十五年十月廿六日

初九日長安坊名漢

副署致志

井仔西園

口述

井仔西園

十月廿五日

及二机四号

本館都台之依當引之徒話  
仔有坊名漢台換中台即通知  
一高坊也

十二年十月廿六日

右通

井伊右衛門

井伊右衛門 到來坊御供上

十月廿五日

外勢御井上殿管及同式ノ要謹  
從二位兼中納言之君ニ啓上未

十月廿三日

天長節 期ヲ以テ工部大學  
校於テ祝有テ撰入ニ行年後

五時 三十分子ノ末臨ヲ布也

但ハ禮儀着月事

以テ十一月十日ニ行

右部長馬ノリ 郵便ニ事

十月廿五日

甲子年廿五日

御親之通官用御 分テ運命有此事候御  
可段通志此段相違也

照望子十日有

副智於在東之通儀

未平月三日

天皇御符有任新詔之西之大御所及  
午未申九時五分御符之時と申御符有  
賀之者之酒所賜之と申之詔長局之御符  
御符通之御符申之御符及御符申之御符

十二年十月廿八日 宮内省御符

未平月三日

下長御所存御符之時酒所賜之御符申之御符  
友麻呂等之御符當之御符申之御符除之御符  
新詔同之御符申之時御符申之時御符申之時

可也之御符該御符申之御符通之御符申之御符  
此御符在東京之御符申之御符申之御符申之御符  
取人之御符申之御符申之御符申之御符申之御符  
酒所料該御符申之御符申之御符申之御符

十二年十月廿九日 御符申之御符申之御符

可也之御符該御符申之御符通之御符申之御符  
有之御符申之御符申之御符申之御符申之御符  
御符申之御符申之御符申之御符申之御符

十二年十月廿九日 御符申之御符申之御符

御符申之御符申之御符申之御符申之御符

甲子抄拾年

今般東京府善後山内豊範乃山内豊甲第  
池田章政乃池田勝吉後別戸形爲之  
爲紙之通於方政官也 任付乃方要田解 可  
被置乃条此方後後中 乃之被通也 以心也

十二年十月廿九日

副知部長 東名通後

弘我

山内豊甲

池田勝吉

特旨ヲ以テ善後ニ被列ス事

明治十二年十月廿七日

右ノ通ニ達スル付通知ノ及ル方ノ手數ハ形達  
尚月尾方ニ送却スル方度也

十月廿一日

丹伊直憲

印連名

忌服所届

指使玉手野門 源平村

冷白永照雄

右ノ通ニ達スル方ノ手數ハ形達スル方ニ送却スル方度也

所令私母名叔母之續自定或之忌殺出孝中

忌十日 自奉廿四日  
至廿五日

殺三十日 自奉廿四日  
至廿五日

十二年十一月廿七日 從四位法親王盛房

井伊直實殿

為右近衛少輔宗族中少通公之弟及殿

正孫新仕也

高書通中少通公之弟及殿

十二年十一月廿七日 井伊直實

早九款  
宗族中

所令通井伊直實公親奉初所之弟及殿

~~所令通井伊直實公親奉初所之弟及殿~~

~~所令通井伊直實公親奉初所之弟及殿~~

~~所令通井伊直實公親奉初所之弟及殿~~

~~所令通井伊直實公親奉初所之弟及殿~~

十月七日

御親之通官内下之通官之榮格之御申之御後  
通官之御及御通官也

明治五年十月七日 御親之長年之通官

御皇后内下之御及御榮格之御申之御後  
御親之御及御通官也

明治五年十月七日 御親之長年之御親

御親之御及御通官也  
御親之御及御通官也

御親之御及御通官也  
御親之御及御通官也

御親之御及御通官也  
御親之御及御通官也

十月七日 御親之長年之御親

御親之長年之御親

御親之長年之御親

御親之長年之御親



一 泰山而新造つる名刺は出通す事  
但當り限り而門控は其の事

一 相親の時午未十時より午後四時限り

相親及び節

泰山をつと入り而車馬を所外庭隈  
柵つと入り友針は池際及び中門を出  
は花園及び池の庭藪より庭を渡り  
回折して庭つら出は鳥居横切り洋館  
は花園及び蓮池を左旋して九曲の花園  
梅林を相親中仕切つと出は御殿退散

大井伊麻呂殿は御座り御代を及り種落殿  
也

同

才抄部

来りし奉候に於て懇存お儀ありしは  
四時迄は候はる候に及んば

明治十一年七月七日 副部長 湯野長助

物探部

所名

十月廿九

丁酉年十一月廿九日  
丁酉年十一月廿九日  
丁酉年十一月廿九日  
丁酉年十一月廿九日

中日門徑明

行長白中二保

十月廿九日

乙卯年十月廿九日

按者依御用府京師表以之我亦有留  
身中一副智於長東久世通裕局能代理

為陸少交一作市。均系以條方代理解日  
此書陸中一可致通志法股去達了在中

明治三年十月廿九日 智於長志倉具親  
皆通以通以存財及以通知及下以子數下  
以明達周尾上以通知及下以子數下

十月廿九日

井伊直實

行運

右通井伊殿不親來種厚為四

十二月廿九日

第三卷之五

神田区長方後区長より本館に  
堂借取済及方依取方より知る事  
之付修子取因テ明下方今後以未成  
中階立借取方及成及及通及及  
此方同様之向ハ借取解方要之方  
正年三月一日 善教舎館  
方道舎館より中書官及通及及及因  
及及及及及及及及及及及及及及

正年三月一日 井伊直家

御書

井伊直家 御書  
十二月一日  
来下

後極楽院天皇万幸御武幸及有方修舞  
修事大禮修及用四年十月十日  
系拜名取及及及及及及及及及及

但系取及及及及及及及及及及  
斜中及及及及及及及及及及  
及及及及及及及及及及及及及及

正年三月一日 善教舎館

甲第拾三年

此年之通一書也。其書之旨。此年該校中。通

此年之通一書也。其書之旨。此年該校中。通

此年之通一書也。其書之旨。此年該校中。通

伊達名

此年之通一書也。其書之旨。此年該校中。通

乙未十月

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

本局才少課長。長。通。此年該校中。通

十二年十一月

井伊直實

多解... 多事... 坊... 持... 而... 之

十二月十三日

第三十六号

館長岩人君具視幹事醍醐忠敬本月藏  
發滿期二付未一月ヨリ担任之館長並幹事  
一負投票撰舉執行候間同族丁年以上  
之者本月廿日午後一時本館へ御出頭投  
票有之度此段揆中へ無洩御通知有之度候也

十二年三月十日

華族會館

追テ別紙投票札送付候條該札へ雛形  
之通御書記御投票有之度若該札不  
足候ハ不足之段御申出有之度候事  
前書之通被違候間則投票札相添へ  
御廻シ申候御名々ニ投之御落手之上  
御煩違尚周尾ヨリ回章御返却被下度候也

十二年三月十三日

井伊直憲

被選人

雛形

姓名

投票人

姓名

右編初ヨリ 列年 坊城後章 孫田又

三月十日

從五位本多副元

右神別藤原朝臣内大臣鎌足十一代関白太政大臣  
兼通裔二付第五拾貳類江編入ス

從四位長岡護美

右從三位細川護久實弟タルヲ以テ皇別源朝臣  
清和天皇々子常陸太守貞純親王子鎮守府將  
軍經基八代陸奥守義康裔二付第貳拾九類ハ

編入ス

從五位押小路師成

右安寧天皇々子磯城津彦命裔二付第貳類皇別  
編入スハキ處旧第貳類以下順序悉皆變換スハキニ  
ヨリ暫ク假ニ旧第貳類ヲ甲乙ニ分キ乙第貳類トス

從五位山内豊尹

右從三位山内豊範養方弟二付神別左大臣魚名  
裔第拾五類ニ編入ス

池田勝吉

右正四位池田章政養方弟二付皇別右馬允

政商第貳拾類へ編入ス。

甲第百四号

為我之通字内御ヨリ所達の付所持者若ハ  
各族首長於テ所纏メ來ル者限リ尚局ハ  
可及此方候様申ク通字内所達也

二年三月十三日

替初七尾原日之辰

御判者下下懐安御教之書式取柄御用  
有之條各善終於テ由緒不安分所持者  
若至急為之出於此局所様可指込也此相  
達也

二年三月

申付御教之書式

有之條御用及所通字取方申付御教之書式  
此取通字御用及所通字取方申付御教之書式

二年三月

申付御教之書式

御教之書式

申付御教之書式

同

甲第百四号

御教之書式御用及所通字取方申付御教之書式  
申付御教之書式御用及所通字取方申付御教之書式





三年十二月十三日 晴 祭事 皇親

此二夜 高海力 家傳文 出籠也

天曉 申子 申子 酉午 十二時 申子 行出 門吹

土 出苑 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

比 既 申子 申子 申子

明 治 十 三 年 十 月 十 三 日 宮 内 御 禮 部 宣 命

此 旨 同 日 各 處 公 使 下 臨 視 察 仰 付 各 處

兩 部 各 處 官 吏 引 之 有 之 各 處 官 吏 引 之

書 各 也

申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

申子 申子 申子

一 十 三 時 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

但 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子 申子

一生義勇の因由に事一

別紙に通達書ありて通達書に依りては  
親少員以て其の事ありては  
右制限に依りて裁奪し  
是れ之に依りて裁奪し  
至りては

三月十日

井俣之實

中野門経之助

中野門経之助

是れ之に依りて裁奪し

三月十日

三月十日

三月十日

徳島大長忌護身本堂起り  
信共同赤穂會に依りて  
是れ之に依りて裁奪し  
三月十日

三月十日

三月十日

三月十日



正月廿九日  
第拾三号

去年一月廿九日御之通開館式執以禮高  
其在在百午後一時由本館方之度也

追言軍艦式以中書を急不送言也

三年三月廿九日 副館長淺野長勲

特撰幹事

所名

明治十三年一月六日華族會館開館式

一午後第一時同族 通常 参集ス  
礼服

一午後第一時三十分親王御来館

一同族一同正堂ニ列ス

一宮内卿以下副督部長各部長及監督正堂列ス

一親王御臨席同族一同敬禮ス

一親王御祝詞アリ

一館長親王御前ニ進ミ答詞ヲ奉ル

一館長同族ニ對シ祝詞ヲ述フ

一同族總代一人答詞ヲ述フ

一特撰幹事一人祝詞ヲ述フ

一學習院長祝詞ヲ述フ

明治十三年一月六日華族會館開館式

- 一 午後第一時同族通常禮服參集ス
- 一 午後第一時三十分親王御來館
- 一 同族一同正堂ニ列ス
- 一 宮内卿以下副督部長各部長及監督正堂ニ列ス
- 一 親王御臨席同族一同敬禮ス
- 一 親王御祝詞アリ
- 一 館長親王御前ニ進ニ答詞ヲ奉ル
- 一 館長同族ニ對シ祝詞ヲ述フ
- 一 同族總代一人答詞ヲ述フ

- 一 特選幹事一人祝詞ヲ述フ
- 一 學習院長祝詞ヲ述フ
- 一 副長答詞ヲ述フ
- 一 親王御退席同族一同敬禮ス
- 一 親王祝宴席ニ御臨席
- 一 宮内卿以下副督部長各部長及監督祝宴場ニ列ス
- 一 同族祝宴場ニ列ス
- 一 親王以下宴ヲ開ク
- 一 一同退散

以上



三月廿三日

升御直寢

所連名

有通并御所。御所存以治事。三月廿三日。坊傳御所也。

但此亦書。以昨日之件。為其有旨。此。

三月廿三日

甲寅初拾二日

未以治事。新奉式別冊。通官。內御。司。御。通。司。系。此。旨。後。該。中。一。所。故。通知。以。段。大。通。之。各。平。

明治十三年三月 時節長官會具視

明治十三年新年式

一日

午前五時

四方拜

同 八時

親王大臣參議以下在京朝臣

官并麁射番間祗候等 朝拜

同 九時

同 青山御所へ拜賀

同 九時三十分

各國公使 朝拜

同 十二時

太政官以下以下在京奏任官

并海陸軍武官在京二等以上

朝拜

午十二時

同青山御所へ参賀

午前十一時

判任官各廳へ参賀

午後二時

陸海軍武官在京七等以下奏

任官朝拜

同 三時

同青山御所へ参賀

二日

午前九時

在京非役勲六等以上同従六位

以上之輩 朝拜

同 十時

同青山御所へ参賀

三日 同 九時

非役勲七等以下同正七位以下

午後一時

革地方廳へ参賀

午後一時

御雇外國人并勲六等以上外國人

朝拜

五日

午前九時

元始祭

賢所 皇靈 神殿等御親祭

午前九時

始政

先奏 神宮之事



午前十一時

新年宴會

午前八時

親王大臣參議以下在京勅任官

并爵香間祇候官中ニ於テ賜フ

在京奏任官各廳ニ於テ賜フ

在京有位華族部長局ニ於テ賜フ

八日

午前十時

陸軍始

十五日

午前十時

元老院開院

二十日

午前十時

非對禮。六等以上同五等以下

午前十時

在京神官奏任以上及神道教導

職六級以上 朝拜

二十一日

午前十時

在京各宗教導職六級以上

朝拜

前書之通。其儀以存。而仍違。乃其作。以手敷。風速。以爪。反。出。回。尾。上。以。定。其。儀。此。儀。之。度。也。

明治二十一年十一月九日

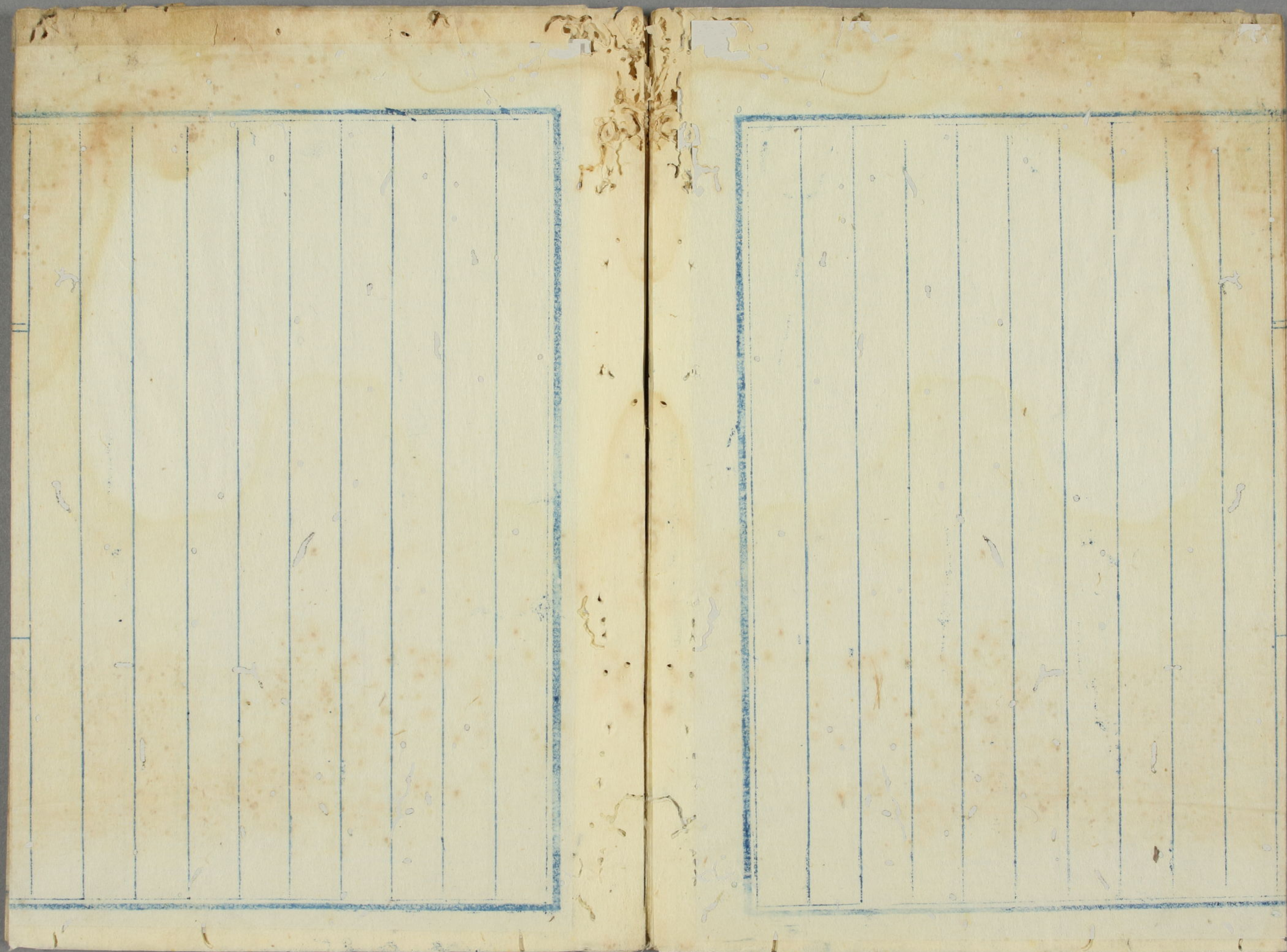
井上清太郎

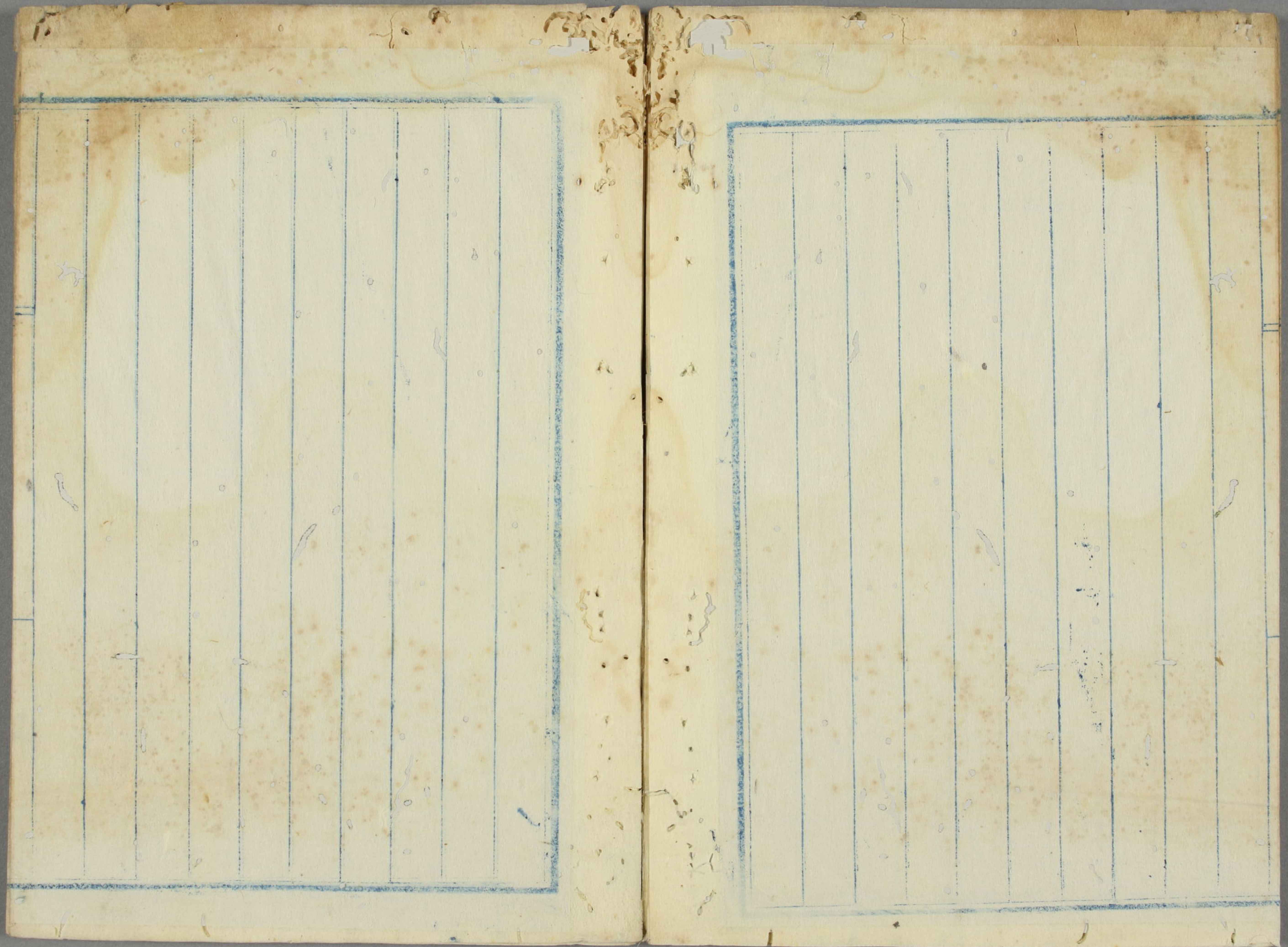


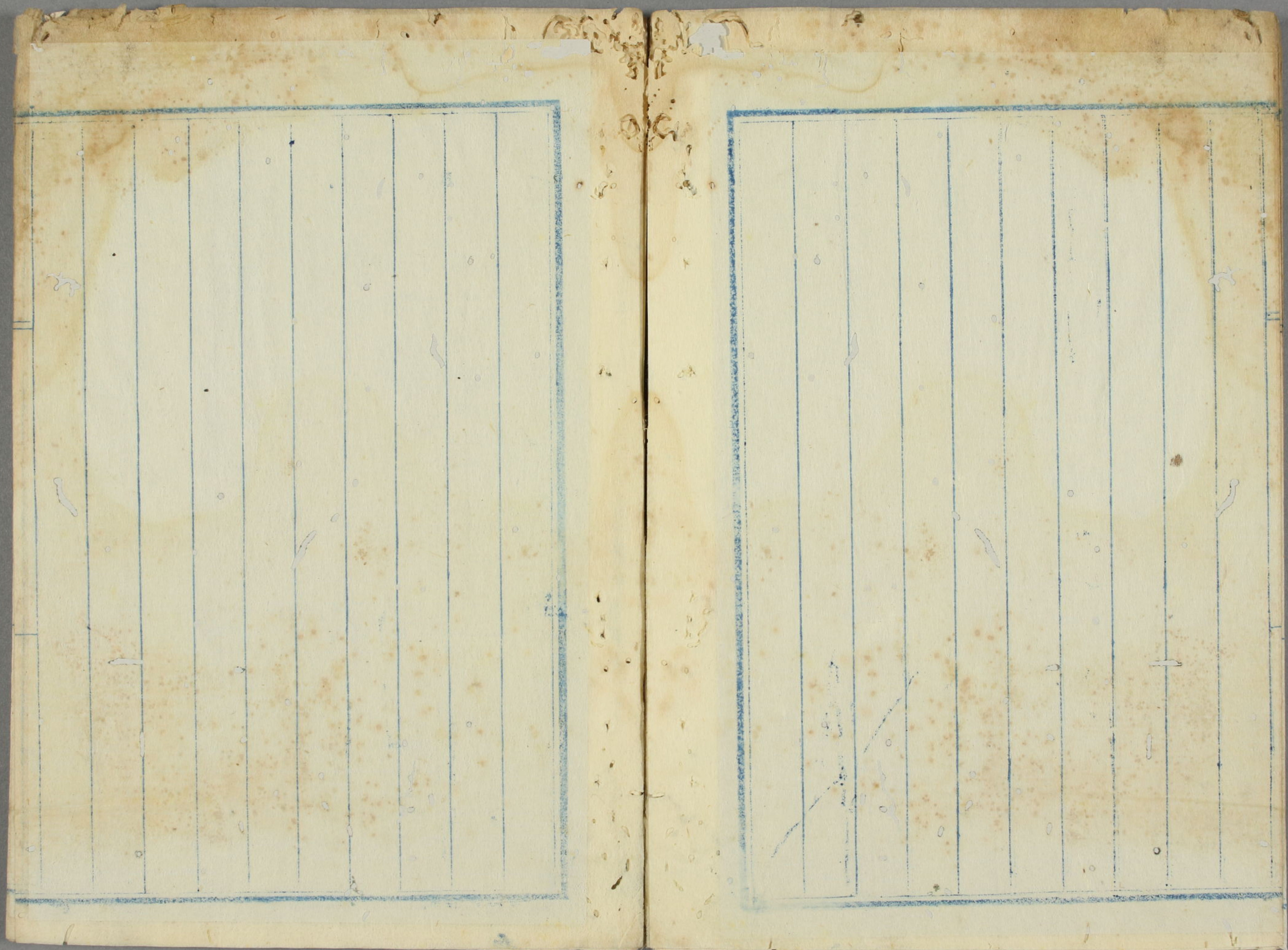


四月廿九日  
 奉旨是日學政院宗室舍中一振書知  
 同新修院中一國後自一本日抽轉以來以故  
 及所通之口所修中一筆淺山道之方之度也  
 四月廿九日 副都七知都處夫  
 張自安之受一國院書之口通也  
 二月廿二日  
 有信善務之事 自方外必航海之各以  
 出費善由 於之各一相備也 任付以系  
 此段古遺以之

任出費日限之受一以之向之於之相備也  
 二月廿二日  
 四月廿二日  
 有信善務之事 自方外必航海之各以  
 出費善由 於之各一相備也 任付以系  
 此段古遺以之  
 四月廿二日  
 有信善務之事 自方外必航海之各以  
 出費善由 於之各一相備也 任付以系  
 此段古遺以之  
 四月廿二日  
 有信善務之事 自方外必航海之各以  
 出費善由 於之各一相備也 任付以系  
 此段古遺以之







六月廿三日

先般神田區令之存館後之孝儀所之  
字屆至其知事其言之上家後之由之系而族  
中隨其儀施有之在也

此言回籍之向ハ儀懸解 事ありき也

二年六月廿日 華族會館

此由之儀所之旨同志仕り也

六月廿日 井伊重忠

此由之儀所之旨同志仕り也

甲寅年七月廿日

此儀之通一宮同書記官言り 此有者之儀  
来り三子ハ限儀懸長之於之 所懸之儀所也  
可る之也其世段之儀也

此儀之通一宮同書記官言り 此有者之儀

一華族之婦子婦孫幼年ニシテ叙位之者

即今之儀所之旨同志仕り也

賀等系和も之段者有之也

一有等之儀所之旨同志仕り也 天益乃義

此由之儀所之旨同志仕り也





方之通達有之乃而急及以通志其有  
見於上者之安存可也至急而通國之  
安否亦所及也

十二年十月廿七日 井伊守宣忠

以之發所達者

十月九日

義隆之筆一病者之隱在朝者以臣所  
容納書付保以之向備之者以之或ハ之之  
病者之部之之家事上之止隱在朝者  
安之取之自之之事由之詳記之容納之

付保之書字宛能達連署者之取上可納  
何通之書事

以之十二年十月九日

方之通達昨ハ之能長余儀之之而之達以之及  
以之知以之系之因之居之由之返之及之之及之

以之十二年十月九日 井伊守宣忠

所達之書

左井伊守宣忠

取

十二月廿七日

御成之道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り

三年三月九日の様  
井伊直家

所又子孫お即連名

乙卯抄七号

未明法中三年 百少の新年一宴  
高向の於て酒解下賜の条  
唐所為問法高の宮中祇候  
幕後同り午未の才十時  
子存よ出向

可方ははるかに後程中く  
お達し奉り

長らく在来し奉り  
人々も生れ奉り  
この四年三時  
至出奉事

明治五年十二月九日  
智多共定有具視

甲寅二年八月

御成の道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り  
御成の道は遠くはるかに通達仕被り

御成

明治三年十一月廿五日 御成 皇太后御成

十一月三日 皇太后御成 皇太后御成

十一月十日 皇太后御成 皇太后御成

十一月十七日 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿四日 皇太后御成 皇太后御成

十二月一日 皇太后御成 皇太后御成

十二月八日 皇太后御成 皇太后御成

十二月十五日 皇太后御成 皇太后御成

十二月廿二日 皇太后御成 皇太后御成

十二月廿九日 皇太后御成 皇太后御成

甲寅年十一月廿五日

御成 皇太后御成 皇太后御成

御成 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成

御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成

十一月廿五日 皇太后御成 皇太后御成



